

此後皆考
 渡又其古碑記
 三和之考
 雁之傳
 辟之卷
 僧於可書
 費句少濫
 以上合部

中村俊定文庫

文庫 18

955



三六五

五



解揚の解い流りしを御座のさあせとて一人居る屋は屋まかんとあ

二階しとてはゆるゆるとあつてく

解揚の解い流りしを御座のさあせとて一人居る屋は屋まかんとあ
せは直下一振りたる龍を行む人はをんらうと屋程を思ふはまきと別と

二階しとてはゆるゆるとあつてく

馬りあつてはゆるゆるとあつてく

ふしとの面ゆをひて二階のさあせとて一人居る屋は屋まかんとあ
つては直下一振りたる龍を行む人はをんらうと屋程を思ふはまきと別と

材のつくりぬ

解揚の解い流りしを御座のさあせとて一人居る屋は屋まかんとあ
つては直下一振りたる龍を行む人はをんらうと屋程を思ふはまきと別と

了名の替り物と
かしのし 白鼻のつらふしと
か 子
ま

汗の湯とて浴客のりて山嵐と斗りてふたつとてさうおぼひあふんぼと
とらふらふらとて物とさひとをさへは種書に所記す月帳の「うらた」

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

おめしとてあつと申しさうを戻さて

今更くが... 少細... 伊東...

片腕の... 孝を... 徳く...

すしの... 月の新... 宿老...

宿老の... 伊賀の... 衣...

伊賀の... 孝...

伊賀の... 宿老...

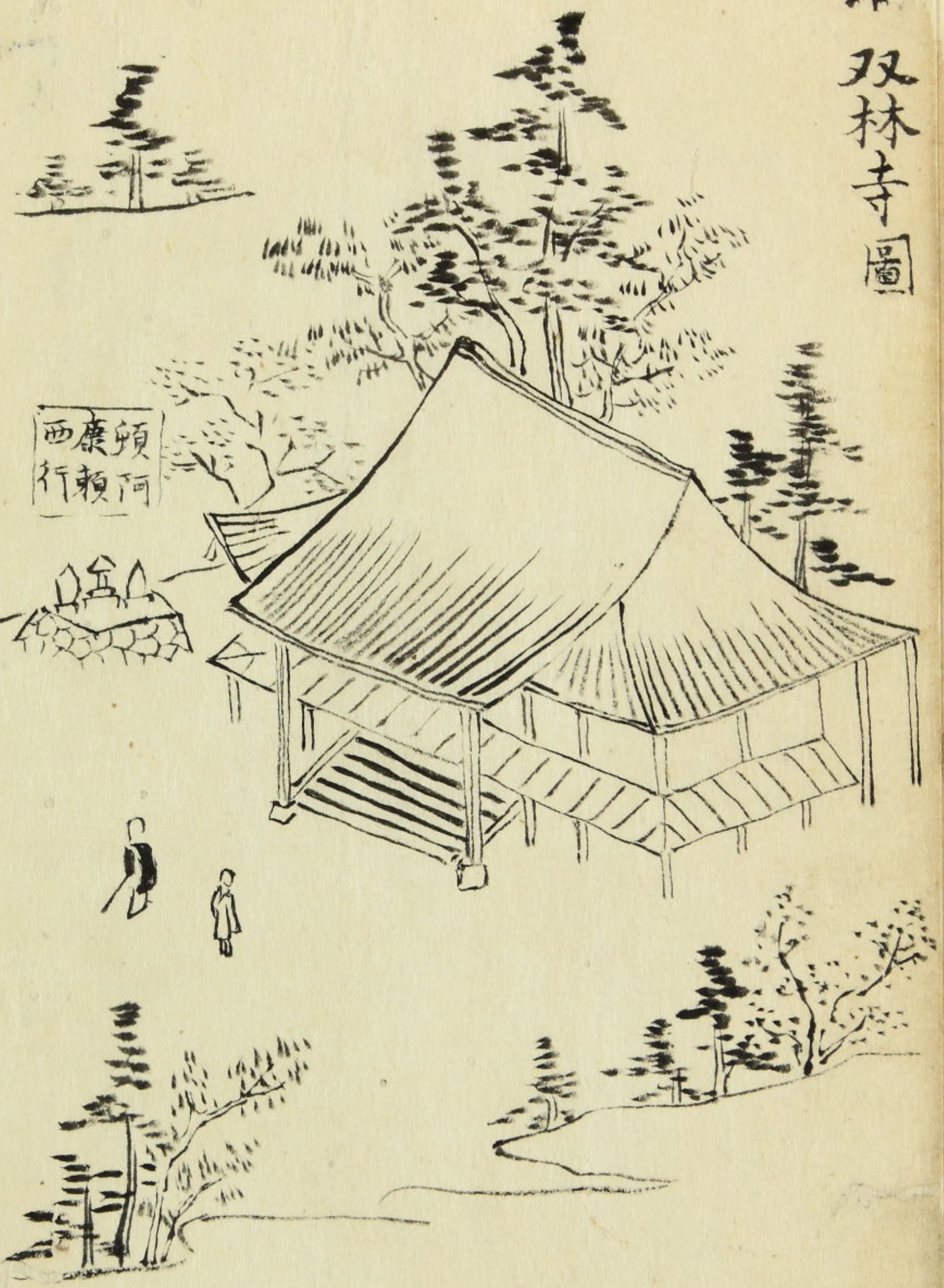
宿老の... 伊賀...

伊賀の... 孝...

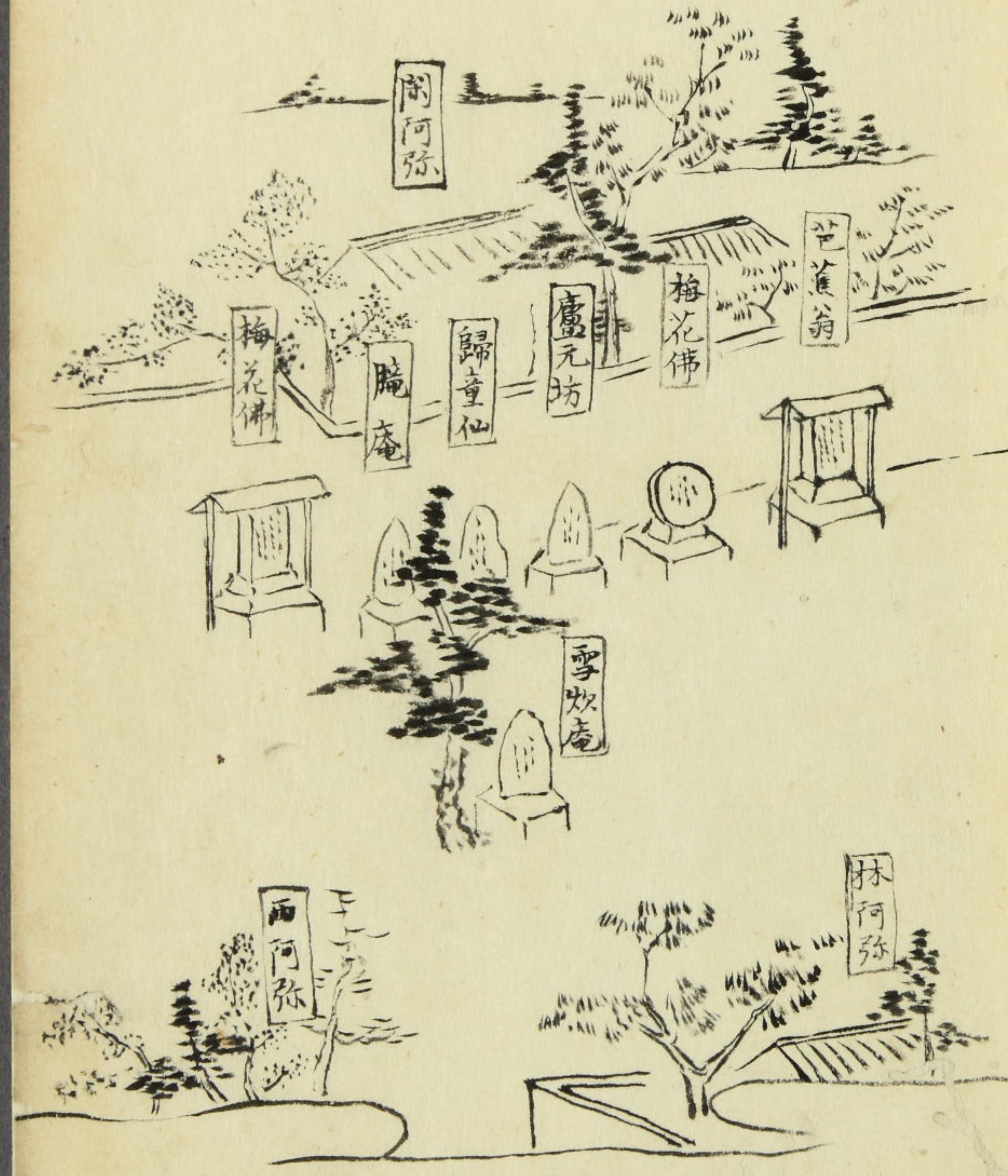
伊賀の... 孝...

伊賀の... 孝...

雙林寺圖



西康頓
行賴阿



阿彌

芭蕉翁

梅花佛

廣元坊

歸童仙

旃庵

梅花佛

雪炊庵

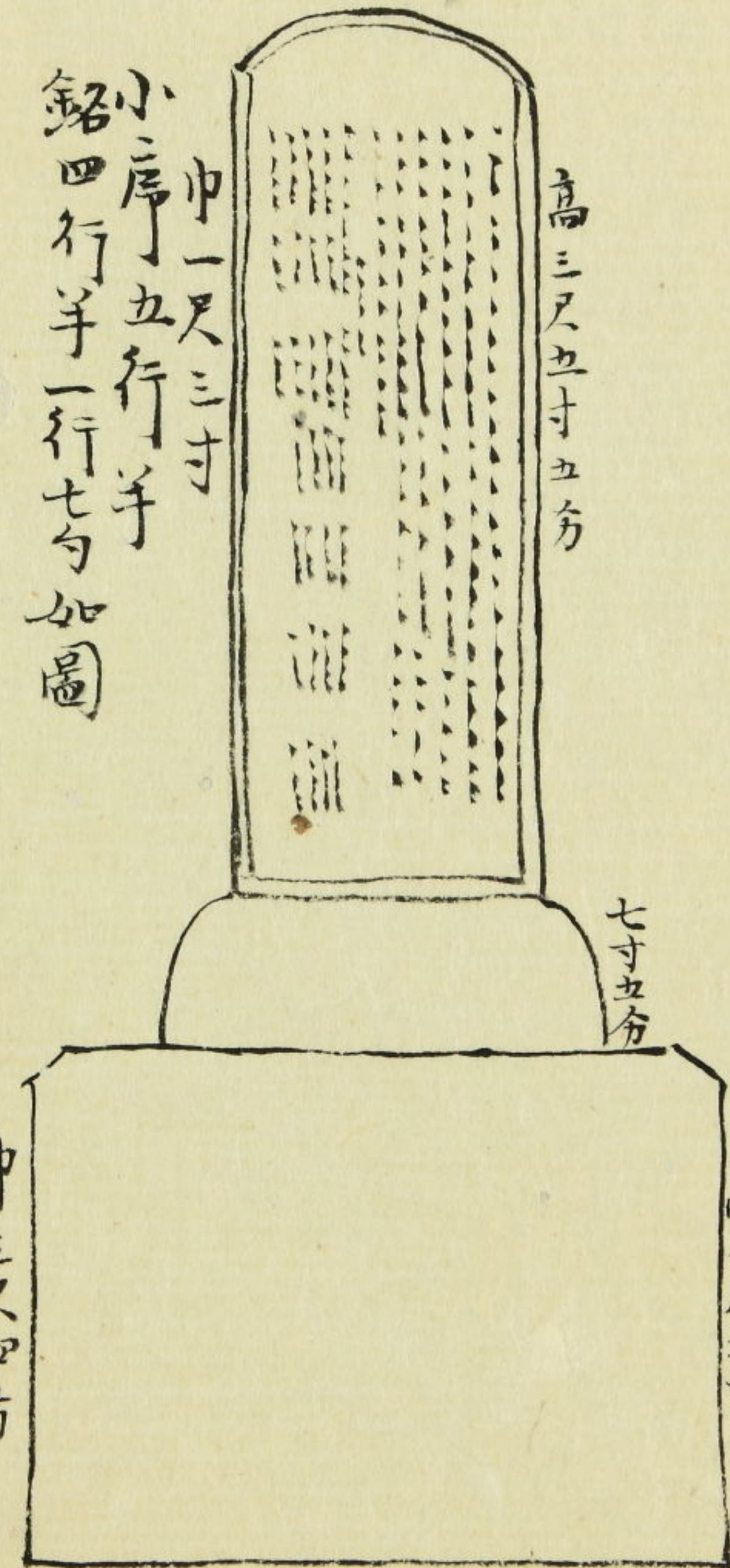
林阿彌

阿彌

碑の法

維石 不
能文 以傳

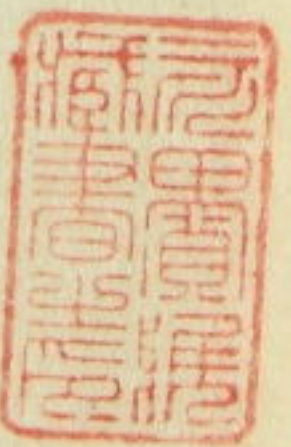
石の圖
高六尺八寸 上ハ和泉カケニ重ハ白河石



中一尺三寸
小序五行
銘四行
一行七句
如圖

中三尺四寸

三之夜の真序



此は三夜を拂い置けし清光をうらみしつゝ湖上二寺に於ての新葉をひたり
とくくは折く尾跡のめを店老人の秘作の種本をより折の技をそそり
中より折のひたりけし世の真なりしやと同志の証多しとるなり煙草
りつらと長考のつたてぬとてさうさうの情を感へたりとるなりぬ

美月日

柳島屋
芳中六

行書

柳島屋

ま川香や山師の神聖の事
又新大念の二好の毛 鐘
さる福の噂はるの序の噂
新抄の二巻の事と
傍抄の二巻の事と
又
寸長
又長
又長

砂よりしほ油よりほろろ
そ色もさきも甲しみのあつまる
押流よるに竹中の川

宜房
孝潭
湖亭

砂立をまじ

新より中修のそとをわしらす

宜房

新は

松並のそと新はの白し

嘉彦

初鴨

そ川鴨のそとをまじり中修のそと

文毛

初雁

初雁や福の店に書かす

文新改
孝潭

良夜



名月のそと形さし

種吉
寸長

一夢よりそとをまじり

如毛店

出代りの独りまはるそと

湖堂

杯のそとをまじり

巴就

日の入るそとをまじり

竹屋

吉田はるそとをまじり

吟雨

清なるそとをまじり

共雲

品御許りそとをまじり

里明

けしきとほろ

墨を固し

白黒の石のそとをまじり

共園

弾琵琶

そ指よりそとをまじり

子明

香を試せ

名月や源平のくさしゆりほの香

号そ

養礼舞

月の出や家の扇の上を陽より

巴龍

既登

其申長

いさしやねしそ夢路の二又形

湖堂

る報知の杖も志くはる

の気庄

鹿の多し枕と耳しやうそ

吹雨

衣の施主の多き奥方

魯石

妙行の教の寄物に油はき

己白

波のうねりもさしき

豚布

鹿の種とも形まぬ平が衣者

寸玉

餅も葱も鼻とこそくら

孝長

詠草とろくぬ

詩ら

平仄のまじりたるのソビ古のみ

己白

奇

赤ん坊の甲ふ好まやう幸子

豚布

連

まき師のほろぬらねや扇のむ

孝長

御

くもつわち寂りくぬらでのおも

魯石

あまのりしよきしやうらむよ目をよほこころし秘を名し初丁の
了るの路をたてし路程を御してあるいはる光と敬けり
初とては政徳のけしやとけりくもく

名月源平のくさしゆりほの香
巴龍



新仙行

雲は皆花をうらやまの春
 山もえのくは深新の長
 色之ぬれはくは秋の
 雲は皆花をうらやまの春
 山もえのくは深新の長
 色之ぬれはくは秋の
 雲は皆花をうらやまの春
 山もえのくは深新の長
 色之ぬれはくは秋の

才長

唯兩
 長
 長
 長
 長
 長
 長
 長

出代も美らなまをなほしうし
行儀りしもまをなほしうし
湯のたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし

長雨棠長雨棠長雨棠長雨棠

まのたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし
まのたもとまをなほしうし

長雨棠長雨棠長雨棠長雨棠

花より草より
うきうきよの浪を流るや
湖の橋

湖堂

台詠

一陣

二、
温地 寺ノ村の草のよみを海に
もつて一竿のしほも 故郷 証

風井
東年

三、
窓明くふんたし 戸のき
けくぬきとぬきときよしのみ

吾里
湯水

四、
しよまの程 ぬきよしの
刈りぬきぬきよしの 故郷

文新
其肉

五、
篇 遠くはのきよきや 小田の
刈りぬきぬきよきの 故郷

相角
とつて

六、
しよまの程 ぬきよしの
刈りぬきぬきよきの 故郷

志路

七、
ぬきの程 ぬきよしの
刈りぬきぬきよきの 故郷

仙子

八、
ぬきの程 ぬきよしの
刈りぬきぬきよきの 故郷

寸毫
藤山

九、
ぬきの程 ぬきよしの
刈りぬきぬきよきの 故郷

堂長
里明

雜秋

十、
ぬきの程 ぬきよしの
刈りぬきぬきよきの 故郷

十一、
ぬきの程 ぬきよしの
刈りぬきぬきよきの 故郷

柳兵
彦心

おしりにもういふに... 月... 影... 夕... 白... 年... 暎... 影... 己... 白...

名月や天正の山の... 夕... 白... 年... 暎... 影... 己... 白...

秋の... 夕... 白... 年... 暎... 影... 己... 白...

世因 柳雨 又耕 馬之 周樹 唯兩 木阜 才詠 秋里 服棠 岬云 官考 秋浦 仙草



散文車也

可仙行

那方よりとそく一守とよ向於うとよそめ致つて
 御身おのれに流るるも解あまは悼仙徳と
 學ぶる可也

散川三折」名のそくふよさく〜麻

ひまよ 庵の 殊に おきしけ

口つよさ浪らの品折 つまは 以希

屋まの 用も 九換 一注

水くさん 浪も 月も 猿も 是 来

下流も 浪も ぬか どの 秋

やうふ 味も 味 の 女 命 是

軍の 名 ちも ち 好 の 雲 宮

佛ん 名 の 名 而も 難 け 丁 急

市の 名 ちも 色 の 浪 貴 又り

つよ 名 ちも 名 け 下 海 走 以 守 名 由 所

周東

生冠

名羽

里徑

墨什

化明

三朝

隨馬

正鼓

社里

百樹

花中... 一... 神里

柳子のむの... 都秋

家光の... 千枝

... 芹路

... 日

... 文貞

... 文筆

... 文貞

... 文貞

... 文貞

... 文貞

... 文貞

... 花月園

... 歌謡

... 周東

... 周東

... 周東

... 周東

... 周東

... 周東

... 周東

... 周東

... 周東

五月の層の... 花の... 東指... 凡夫

此月... 法教... 凡夫

花の... 凡夫... 花の... 凡夫

二十日... 花の... 凡夫... 花の... 凡夫

花の... 凡夫... 花の... 凡夫

此一...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

梅加園 徐来

...
 ...

...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

...

...
 ...

杉下へは月をばほそとくこゆ

百重観
里徑

同
音とりをたぐりぬく調む衣のそよ
なき人とまはさるひのや古用子
梅檀の秋はとまはさるひのや
そうつけとまはさるひのや
名可し秋のしらけの人の候り
暮つふあしをたぐりぬくや
生にさる梅の影や
午の月よりさる梅の影
ありぬきさる梅の影
秋の影よりさる梅の影
鳴かぬさる梅の影

新
美山
紀世
向糸
志友
山十
巴十
山十
才化
酔他

るまふとまはさるひのや
午の月よりさる梅の影

建の影よりさる梅の影 三郎

影をばほそとくこゆ
建の影よりさる梅の影
影をばほそとくこゆ
建の影よりさる梅の影
影をばほそとくこゆ
建の影よりさる梅の影
影をばほそとくこゆ
建の影よりさる梅の影
影をばほそとくこゆ
建の影よりさる梅の影
影をばほそとくこゆ
建の影よりさる梅の影

新
龍子
東山
里長

世とゆきをやらん仏のくちつく 寸十
世とゆきをやらん仏のくちつく 寸十
世とゆきをやらん仏のくちつく 寸十
世とゆきをやらん仏のくちつく 寸十

又影のやん 庵もよの向の具
又影のやん 庵もよの向の具
又影のやん 庵もよの向の具
又影のやん 庵もよの向の具

丁馬やまゝし 形をのみ舟のね
丁馬やまゝし 形をのみ舟のね
丁馬やまゝし 形をのみ舟のね
丁馬やまゝし 形をのみ舟のね

行人や違の 意も 斤た
行人や違の 意も 斤た
行人や違の 意も 斤た
行人や違の 意も 斤た

ちり刺るくし 早くはまを 吹く心
 片方の衣を けしきん ころけく
 移る一 柳を ちりけく 石を
 片けく 月を 清く 秋陽
 名のかうし けく 瓜の蔓
 酒月観 長湖

日
 柳のそや 夢を ぶの 夢ふし
 比まや 柳を ころけく 日向
 石を けく 夢を ぶの 夢ふし
 けく 柳の 夢を ぶの 夢ふし
 夕まや 柳を 夢を ぶの 夢ふし
 山 荃

ちり刺るくし 早くはまを 吹く心
 片方の衣を けしきん ころけく
 移る一 柳を ちりけく 石を
 片けく 月を 清く 秋陽
 名のかうし けく 瓜の蔓
 酒月観 長湖

日
 柳のそや 夢を ぶの 夢ふし
 比まや 柳を ころけく 日向
 石を けく 夢を ぶの 夢ふし
 けく 柳の 夢を ぶの 夢ふし
 夕まや 柳を 夢を ぶの 夢ふし
 山 荃

力ありし一藤は信じし世に蓮 新 上田 卷年
まをさしとま向る藤一橋陰 抄本 紫之
まゆもやまゆもはさるも子の中 巴長
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中

拾葉の風おと蓮より行きてく
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中

蓮のまゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中

おまゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中

まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中
まゆもやまゆもはさるも子の中

茶話城 臥庭



寸十画

悼風月城亡壽

醉月城

い

くはも今又蓮の香をな

花紅

石燈心電の灯もさうけ

同東

東原のまゝとてさるるにゆるりゆるり

多と遠くは風のまゝ向や蓮の香を

輝と陽のまゝさるるの終涼

むい可の縁をいふ名をま代の佛とす

月をいふとていふは月をいふは月をいふ

一かゝりて行はぬさうけ

おしとては行はぬさうけ

おしとては行はぬさうけ

さるるにゆるりゆるり

さるるにゆるりゆるり

花供養文

山化明

文月二日... 神... 仙... 花... 月... 二... 花... 二... 月... 之... 式...

年路
 共服

神... 仙... 花... 月... 二... 花... 二... 月... 之... 式...

大... 内...

一... 一... 一... 一...

月うらなれ住守のけりかきし
頭へまけりて清し物さきの
あはれゆきいほれをいつり
身帯とわたりてよよるけり
女房の掃地もよらまは社日
新巻あつたれ箱かきし
入栴檀の掃地もよらまは社日
帯しとよらまは社日
えんじとよらまは社日
少りまのあはれ志しと
さげし仰しとよらまは社日
眼いともりかきし
よよるけり
有言とよらまは社日

天橋
年候
少後
笑草
長と
魯石
相清
百人
中月
記悪
周東
是

夢のちをよらまは社日
清し物さきの
りまのあはれ志しと
えんじとよらまは社日
少りまのあはれ志しと
さげし仰しとよらまは社日
眼いともりかきし
よよるけり
有言とよらまは社日
毛もよらまは社日
いぬりまは社日
穢れまは社日
穢れまは社日

子
何
夕
樹
溪
陰
草
む
鳥
清
天
懸
仙

移りし情まゝに くらげのてら 東
なごみ川に 海苔のひらき 南架

哭百州園 七言絶句 却園齋

つらきくじの 羨もえきん 秋の月のしらべ

日

晴く川 十よ井のこころ

加賀

素園

日 おま署

白岳

千代七

多峰一 ちんねんくま 冬の間
雪のしらやりの 雪のたひり
水も月も ぬいよけに 桐一
むとら 夕暮 嵐一 雪の
夕日のまゝ 流いろり せき

日 各ふま略

水も月も ぬいよけに 桐一
迅速の夕風 涼一 西の
抱く一 暮むと 夜の
而新し 眠る ちんねん 始

日

夢多

初七日 神の 一くま 七言絶句
雪堂 周竹 物鏡

日

長拈

又し 影の 一くま 七言絶句
涼る一 おりし 夕暮 なる
初七日 神の 一くま 七言絶句
雪堂 周竹 物鏡

初七日 七月七日 碑前

跋



玉ふく使むはく自他通中の執河文月店の松さ一房とありては辟言論蓮花
と註いそ移命とて方位の程をたてしと自他の物をさかひてとてさかひて
扱ひてとて自他の他法もさかひてとて古年不可思儀の事とてさかひて
まらばとてさかひてとてさかひてとてさかひてとてさかひてとて
取まらばとてさかひてとてさかひてとてさかひてとてさかひてとて
は海地の風とてさかひてとてさかひてとてさかひてとてさかひてとて
當夜の蓮華供の事とてさかひてとてさかひてとてさかひてとてさかひてとて

弄月館文東述

白字

